ある。そこで、法學をやつて居るものは、未來の總理大臣を夢想し、商業家とならうと志すものは、日本では先づ澁澤だとか或は岩崎にでもすぐなるやうな考へで居る。ところが、理想と現實とはなか〳〵一致せず、さう何もかも豫想通りには人生のことは行かぬのである。所謂目的は立ててやつて見るが、その目的に至る勉强の行爲が身につとまらぬから失望する。煩悶苦痛の聲は、多く是の如き時、種々その形を變じて發せらるることが少なくない。これ卽ち單なる目的生活の不滿の叫びである。缺陷である。そこで、その反動として兩三年前から、また趣味といふことが多くの人の口の葉に上るやうになつて來た。數年前成功論の盛んであつた時には『成功』といふ雜誌さへ出來た。今日でも尙ほその種の思想は一部の青年を動かし、盛んにその所謂世の成功者といふ人の口をかつて成功の秘訣が說かれて居る。が、今日では、寧ろ人々趣味といふことに興味を持つて來たやうである。そこでまた『趣味』といふ雜誌の名さへきいて居る。現實の人生とか、或は又自然主義とか申す思潮なども、どちらかといへば、何れも皆な趣味生活に一括することの出來るものだと思ふのであります。これは、どちらも、人間生活として、全く離れてしまうことの出來ぬものである。眞實の生活には、常にこの二方面が併存して矛盾なく行く所のものであると信ずる。然し、此二者は常に何れにあつても、そのかたちこそ異なれども、相對立して居るのである。

佛敎にも、此現實に重きを置くものと、また理想に重きを置くのとがある卽ち、佛敎の信仰は生死問題の解決であるといふが、その生死問題に就て、生の問題に重きを置くものと死の問題に重きを置くものとがある。これをその信仰を求めつつある所の求道者に就いていへば、先づ若い方は生の問題に就て苦み、老人は死の問題に苦むのである。そこで、自然に罪惡觀、無常觀の二大關門では、青年の人は前者をくゞつて信仰の堂宇に入り、後者には老

人の人か多い、更に無智觀といふことを申す人もあるが、そは總門とも申すべきもので何れも眞面目に之を考察することは、宗教にまで參らずとも何人も之を體得することが出來ると思ふ。然し、眞實痛切なる無智觀となつては佛教では根本無明であつて、そのまゝ罪惡觀と一致してしまうのである。そこで、先づ、自力、他力、聖淨二門で考へて見ると、その種々な願を立てゝ佛果を目的として修行する邊は、卽ちこれ自力聖道の目的生活である。既に目的生活であるからどうしても、實行卽ち行が最も必要となつて來るのである。そこで、聖道では、實行卽ち修行をはげまねばならぬ。それでは、趣味の方面はないかといふに、ない位ではない、之を淨土教の西方往生の思想と對比する時は、此土入證、娑婆卽寂光で全然禪宗の如きは趣味中心といふてもよい位だと思ふのである。禪宗は自から不立文字といふて居る。然るに、禪宗ほど、今日まで文字の多い宗旨は、澤山ない。支那でも日本でも禪僧には文字のあつた有名な人が多い。また佛教詩歌の趣味的文學は、多くはこれ禪文學であつたのだ。これで見ても、その教の目的的でなく直覺的で趣味的であることが推知せらるるのである。どんなものでも、そのまま之を美化する所に趣味の生命はあるのである。如何なるかこれ佛。云く、「乾屎橛」といふやりかたである。木片につきたる糞をそのまゝ直覺者と見ることは凡眼では分らぬ。到底目的的には考へられぬ趣味の絶頂である。そこになると、淨土の教は、大に目的的のものである。卽ち此土は、どこまでも穢土であつて淨土は西方にある所の彌陀の淨土である。我等は到底此土で成佛することは出來ぬ。我等は彼の土に往生して佛となるのである。さうすると、目的的であるから、茲にどうしても、往生の手段卽ち行といふことが必要となつてくる。然り、その行が必要であるから我等の爲めに親の如來が南無阿彌陀佛の行を御成就下されたのである。この行によつて、我等が目的的生活は往生す

るにあらざれば成就することは出來ぬ。此方面からいへば、他力敎の信仰生活は全く目的的生活といふことである。從うて、死の問題の解決である。法然聖人の南無阿彌陀佛往生之業であつて蓮如上人の所謂後生たすけ給へでなければならぬ。我等が最後の目的的滿足は淨土で得らるゝのである。

されど眞實の親は唯單に迎へとるだけの親ではない。常に我等を護り下さるゝ御親である。これ實に絕待他力敎の趣味生活の發端である。親は、斯樣にそだてあげるといふのみでなく、唯何となく可愛といふのが親の慈悲である、牛乳には生長といふ目的的生活の滋養が本質であるにせよ、親はそれに砂糖を加へて我等が趣味的生涯にも滿足を與へて下さるのである。我等が現在の生活は、その迎へとるの御慈悲を待ちつゝ、私共はまのあたり、そのまゝ乍ら救うて下さるゝ御親の御慈悲に生長するのである。誰でも、自分現在かういふ生活をして居るやうになつたのは、いろいろと親が我身をそだて、またその間には少なからぬ學資等をもして下されたから親が難有いとか、或は又若し今後病氣になるやうなことがあれば、親は屹度かうして下さるから難有いとかいふてもよいが、眞實親の難有いとの念慮の中には、寧ろかうして下されたからとか、或は又かうして下さるからと定件が附いてゐては、まだ私には何となくもの足らぬ心地がする。かうして下されたからとか、かうして下さるからとかいふので難有いとのみいふのなら、そりや一種の功利說である。そこには、まだ親子の間に他人氣の距りがあるやうに思ふ。勉强する初めの目的は、先づ〳〵自分が一番かういふものにならうと思うて、自分のすきな學課も學ばう、或はまたすきな職業を選むであらうが、段々と勉强して見ると、もう自分がかういふものになるとか、ならぬとかいふことは全くうち忘れてしまう。勉强そのものがおもしろく、職業そのものに趣味が出來る。そこで、知らぬうちにその目的をも達するものである。私は未來の後生

が苦になつた、その苦になる後生を行末たすけてやるとの仰せだから如來樣が難有い。さうであるからたのむといふのでは、そこにまだ多少の餘裕がある。かうである、かうして下さるからたのむといふのであつては、まだそりや、絶待的にたのまれ、絶待他力に丸々まかせた人とは申されぬのである。絶對的にたのまれ、眞實如來を我親と信じて見れば、かうしてとか、あゝしてとかの考は殆んどない。たのむためにたのみ、信ぜらるゝ爲めに信じて、あの、かうのの定件はない。豫想はない。南無阿彌陀佛は、「往生之業」と銘打てあれば、勿論、往生の目的本位であらう。これで未來たすけて下さるから難有いに違ひない。さればこそ、我聖人も「念佛して彌陀にたすけられ參らすべし」と仰せられてある。然し、それのみではない、この南無阿彌陀佛でたすけ下さると救濟の手段としての南無阿彌陀佛は單に手段でない、その御ままの報謝の南無阿彌陀佛である。たとひ、法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄に墮ちたりとも更に後悔すべからず候」といふに至つては、これ實に現在の御慈悲を認めることによつて先きの往生の目的本位が、その儘趣味本位となつてあらはれて居る頂點であると思ふ。我祖はまた之を「大悲の願船に乘じて光明の廣海に浮ぶ」とも仰せられた。實に、絶待他力の信仰生活は、此目的及趣味の二生活を包括して居るのである。そこで、今その絶待他力の信仰生活中、正さしく趣味生活の本源となるものは何であるかといふに、こは申すまでもなく、恩寵觀である。如來の御慈悲である。然かも、その御慈悲のなかには、常にその目的が併在して居ることは、何人も忘れてならぬ事だと思ふ。蓮如上人は、後生たすけたまへといひつゝ、正定と滅度との二益を丁寧に敎へて下された、宗祖聖人は、「有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみ遊ぶ」と歌うて、ありゝと趣味生活のうちに然かも目的生活の影面を示して置いて下された。思ふに、手段と目的、現實と未來は非常な

差別があるやうに見ゆるが、見ゆるうちは理屈じや、宗學じや、實際上では
さう距つて居るものでない。目的のなかにも手段は存し、現實のなかにも、
あり〳〵と未來はあるのである。目的生活と趣味生活とは、一見相ひ容れざ
るが如くにして、然かも矛盾なく共存しつゝあるものである。
絶待他力の信仰生活は、目的本位であつて、そのまゝ、亦た趣味本位であ
る。

第一七章　往生

まだ、私がほんに幼い時であつた。
能く何事かあると、必ず我家に母の手助けに來てくれる所の隣の婆さんが、
何日もの如くやつて參つた。御堂の椽に遊んで居る私に向うて、坊ちやん
一寸御手を出して御覽といふから、何時もの如く何かくれるのかと思うて、
掌を開いて出すと、婆さんは、頻りと我掌の筋を見ていふことには、右掌
の筋は能く通つて居つて此上ない筋である。が、惜しいことには、左の方の
筋が流れて居る。若し、左の方が右のやうであつたならば、坊ちやんは屹度
御出世なされますがなあ。惜いことには、左が流れて居るというた。それか
ら、太閤さんには、中指にかけて天下筋といふ筋があつて、それが一節通つ

て居らなかつたから、自から小刀でもつて筋をつけられたといふやうな話をしてくれた。誠に馬鹿げた話であるが、私は小刀で流れた筋を直すやうなことは致さなんだが、幼心にはどうか此左の筋が右のやうであつたならばとは時折思うたことでありました。さういふ爲めであつたのか、私には、今日いろ〳〵の事を考へても、時折すぐ筋といふことが思はれるのである。

どうも、世間の事は一切萬事多くは筋である。その筋、その筋によつて、萬事が出來て居るやうに思ふ。現に何事についても、出來のよいのを筋がよいといひ、出來の惡るいのを筋が惡いといふのである。また、病氣でも流行すると、さて此病氣の發生地はというて、近來は頻りにその筋をたどつて之が撲滅と豫防とに注意することとなつた。また、惡い子供でも出來ると、すぐと、世間では、あの子の祖父さんが、やはりああいふ風であつたとか、あれはあすこの家筋じやなどとよくいふことである。醫者は病人を診察する前に、一往その容態をきくと共に、頻りに父母兄弟等はどういふ病氣になつたことはないか、どういふ病氣で死んだとか、さては、祖父さん祖母さんそれ已上の人々の死因までにも立ち入つて近親の病の筋をたづねるのである。さうして、その病にもいろ〳〵あつて、實際その病にかゝつて居らぬにした所が、世間では惡い筋の人であつたならば、それを嫁にも或はまた養子にも貰はぬのである。そこで、どこでも嫁を迎へ、また養子を貰ふ時には、その人物の如何なることは申すに及ばず、先づその家筋、病筋をば、出來るだけ探索するのである。充分にそれを見屆けなければ、安心して之を迎へることは出來ないのである。そこで何事にあれ、眞實の安心といふことは、充分その筋の何たるかをも見屆けた上のことである。

布袋さんといへば、繪にもかかれ、能く床の置物にまでもなつて居らるるから人の能く知る所である。あれは、支那の禪宗の方であつて、當時彌勒の

化身とまでいはれた人である。大きな袋を背負うて町を歩き、そこらに子供が遊んで居ると、すぐ大きな袋から、御菓子や玩具をとり出してやらるるので、その姿が見えると、子供達は、それ布袋さんが御居でたというて、杖にすがつたり、或は衣の袖をひつぱつたりしてその前後左右をとりまくのである。そこで、親達も大變、子供を可愛がつて下さるのをよろこんで居たのである。この故に、布袋さんが、町を御通りにでもなると、親達も時々布袋さんに對して、「ちと、御這入り下され、どうぞ御休み下され」といふのである。氣にむくと、如何なる家にも這入つて、「さては、御前が家の主人か」。「はい、手前が主人で、常に子供が御世話になりまして」と御禮をいふと。「さうであるか、うむ、其許が、あの子の親か」。「誠に御禮も申しませぬが」などといふ語には少しも耳を借さず、「然らば、其許の親は」。「あの子の祖父さんですか、もうとうに相果てました」。「それならば、その親は」と申さるゝから、それは、最早や死にましてから何十年にもなります」と答へると、布袋さんは、から〳〵と笑うて、「これはしたり、親達は死なれたか、それなれば其許もその親の子じや、可愛い子もその孫じや。御家は死筋じやのう、油斷はなるまいぞ」と、家の上には上りもせずに、かくいうては立ち去らるるのが常であつたとのことである。

大聖釋尊は、もともと、どういふ家筋の方であつたかといふに、いふまでもなく、摩訶陀國は迦毘羅城の王家を繼ぐべき家筋であつた。そのまゝに行くならば、淨飯王の跡をうけて王者となるべき御身分卽ち筋の方であつた御誕生間もなく相者もその御姿を拜して、太子には、四海を統御なさるゝ所の轉輪聖王の筋があると申し上げた。これをきいて親の王樣は、大變に御悅びになつたことである。が、それが段々と御生長遊ばされて、ある時城門を御出ましになると、或は病人や、或は老人等を御覽になつた。その後、死人

を御覧になつて、いよ〳〵世の無常に御心をお痛めになつたことである。自分は唯王家の筋であるだけならばよいが、自分はまた病筋、老人筋、それ位ではない、死に筋じやといふことに驚かされて、遂に十九歳の時に宮城を出ておしまいになつたのである。また、我親鸞聖人とてもさうである。同じくまた御年十九歳の時に磯長の聖徳太子の御廟に參籠なされた。計らずもその告命によつて我はそのうちに死ぬるといふ自覺に一段の驚きを御深めになつたことである。考へて見れば、さうである。聖人は既に御兩親とも御死になつて居る。いよ〳〵以て、我身の死に筋なることは、心の底から感ぜずには居られなかつたのである。釋尊が、宮中色味のうちにありながら、常に憂愁のうちに沈ませられたのも、全く御母摩耶夫人は御誕生間もなく御かくれになり、御自身もまた母の如く死筋であることを御自覺なさるると共に、また、あゝ我母戀しいの思ひに暮れさせ給ひし故である。げに、宗教は何を教へるかといふに、何れも皆な筋を教へることである。人々の筋でなく、我卽ち自己の筋である。自己の筋をたづねて行くと、誰も彼も生れたからして生の筋であつた。病にかゝるから病人の筋である、段々と年をとつて行くから老人の筋である。誰一人死せざるものなく、我々の先祖は愚か、身うちのものも皆な死ぬ已上は、我等は確かに死筋のものである。嫁取りにも、養子をさがす時にも、人々は大變、その家、その人の系統をたゞすものである。げに家筋、病人筋までは人をたのんでまで探索するが、お互に最も恐るべき死筋のあるといふことは、誰しもそれ程に知らずに居る。たとひ、恐るべく、或は厭ふべき病の筋ある人でも一生涯その身の上に發現せずにすむことがあるが此死筋のみは、誰一人その身その身の上に起らずに居ることはないのである。どの筋が恐しいというて、こんな恐ろしき筋はない。釋尊の御出家も、親鸞聖人の求道も皆な此の筋に驚かされ給ひしことである。

然らば、われらの筋は、たゞこれだけであるかといふに、まだ此外にいろ〳〵の筋がある。一寸としたことに腹を立てる。こんな所で腹を立てゝはならぬといふことを知つて居ても、思はず知らず腹を立てる。これ明かに、腹立筋のものであることが知らるる。あつても、あつても、ものがほしくてならぬ。さう欲深くせいでもと心に思うても、出す可きものとなると、何でも出し惜みをする、これ明かに貪欲筋であるからである。或はまた、何と思うても、あかぬ事に愚痴をいふ、これ明かに愚痴筋である。この外に、また嫉妬をする、嫉妬筋である。虚偽を行ふ、虚偽筋である。かういふやうに考へて参りますと、私共は、一つや二つの悪い筋をもつて居る位でなく、「五逆十悪具諸不善」と、悪い筋といふ筋は皆な悉く之を我身に具足して居るのである。否な具足して居る位でない。佛法の上よりいへば、日々夜々我等が身口意の三業には、正さしくその悪い筋が現はれて煩悩だらけて醜態を演じて居る。

浅草邊に行くと、もとは能く本願寺の門前や、觀音さんの裏手には、手や足の落ちた乞食や、腐りかゝつて居る面相の癩病患者のもの乞ふのを見ることであつた。あれは、正さしく身の上の恐ろしき病の筋を持つた者の姿である。我等が心の上の病の筋は、あれ已上恐ろしきものであつて、あれ已上の醜態を日々現出して居ることである。昔、正法の時の人々は、何れも皆な智慧を研き、いろ〳〵の修行戒行を保つて佛となつたのである。その筋よりいへば、我は佛の性を具して居るとか、或はまた我が卽ち佛であるともいふやうに考へて、いろ〳〵と工風に工風を凝らして居る人もあるのである。が、果して私共は之をその日々の日暮に見るに、ほんまにさういふ筋を有して居るか、どうか、我と我心を見れば、我ながらあきれる程の奴である。煩悩惡業の筋は日々夜々に顯はれて居る。智慧の眼はつぶれ、戒行の手足は既に〳〵落ちてしまつた。もう、どうすることも出來ぬ身であり乍ら、その愚痴

と來ては、いよ〳〵人一倍にいふのである。諸佛菩薩の御逃げになつたのも決して決して無理ではないことである。われながら、あきれはてたる奴である。若し、さういふ奴と知つたなら、最少し此世のことにつけ、或は又後生のことについて驚きを立てさうなものであるが、さういふこともせない、いよ〳〵以て助かる緣のない奴である。淺草邊の乞食は、やはり道行く人に哀れを乞うて、その日その日を送つて居る。一錢二錢の銅貨を投げてやれば、ともかく難有いというて額を地につけて御禮をいふのである。然るに、われらは、どうであるか。自から思うてさへぞつとする。かういふ日暮の出來ぬ奴が、かういふ日暮をさして頂いて居る。ところが、實際はといへば、御禮どころか、不足をのみいうて居ることである。思へば、誠に勿體ないことである。これ全く、我力ではない、佛恩國恩その他あらゆる御恩の然らしむる所である。申譯のない罪人である。ものを盜み、また恩を恩とも思はぬ奴なれば、今またその恩をも盜んで居る。いよ〳〵以て地獄行きより外に仕樣仕方のない奴である。我からいへば、どう見ても佛には緣、手がかりのない、地獄筋のものである。

先帝御在世の砌、何か御祝ひの時であつたか、華族の名ある方々に御酒を下さるといふので、何れも皆な參内せられた。かゝる時には、御酒を頂くことを「御杯を頂く」といふのださうである。その時、蜂須賀侯には、御杯を頂きますと、御酒杯まで頂いて下られたさうである。先帝陛下には、大變おもしろき奴かなと、微笑を龍顏に浮べさせられて、蜂須賀は、昔から油斷のならぬ家筋ぢやなあと仰せになつたことである。この一警語皆な〳〵先帝の御聰明に亘らせらることを知ると共に、蜂須賀侯は恐懼措く所を知らなかつたときゝ及んで居る。これは、餘程おもしろき御語であると思ふ。げに、我等の筋は油斷のならぬ筋である。何日何時無常の風が來るかも分らぬ。そ

れをうかつに油斷して居る。そこで、一休禪師は、元日から髑髏をとり出して、家毎に御用心〳〵というて囘禮された。こは、新年で御芽出度〳〵というて居るその家も、その實布袋さんの仰つた如く、死筋の家であるからである。

私の手筋を見てくれた婆さんは、またその時、かういふ話をしてくれた。太閤さんは、遂に天下筋によつて天下をお取りになつた。そこで、賴朝さんの木像に對してかういはれたさうである、「君が天下を取つたのは、君が家筋がよいのと、清盛が君を生かして置いた間拔の爲めである。僕は草刈小僧からこれまでになつたのはこれ全く自分の働きである」と。成程、太閤さんは偉らい、彼は家筋で天下をとつたのではない。正さしく天下筋の我腕二本によつて、遂に天下を掌のうちに入れたのである。が、惜しいことには、後世長くその筋はつゞかなかつた。その後、豐臣家が天下を失ふ高慢筋等は、既にまた此一語の上にもあり〳〵と顯はれて居る。

私は、朝夕佛前に合掌禮拜する時、折々我手の筋を見ては、幼い時に婆やがいうてくれたことを思ひ出すことである。「右の筋は通つて居る、惜しいことには左の筋が流れて居る、」と。あゝ、その流れて居るのは、曠劫よりこの方、常に沒し、常に流轉して出離の緣なき我すがたである。かゝるものをも救ふといふ御慈悲の我胸に通つて下されたればこそ、今はやすやすと疑ひなく本願乘托の身となることが出來たのである。「往生は掌のうちに在り」といふ語がある。我もまた出世往生の大益を掌のうちに得さして頂く身となつたことを歡ぶことである。

犧牲 終

大正二年十一月一日印刷
大正二年十二月五日發行

著作者　佐々木月樵
發行者　東京府巢鴨町二丁目三十五番地　原子廣宣
印刷者　東京市本所區番場町四番地　守岡功
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京府巢鴨町二丁目三十五番地　無我山房　振替東京三一二二番

定價金七十錢

複製不許

安藤州一譯　新刊

ソクラテスの教訓

金七十錢　郵税八錢

ソクラテスの教訓は、先師清澤先生の色讀せらるゝ所であつた。爰を以てさきに「清澤先生の信仰坐談」を著はせし著者は、先師に接するの念を以て、敬虔に本書を譯出せられた。自己省察の宗教的根本義より、日常生活の指針、修養の要義等、巧妙なる氏一流の談話と、剴切なる譬喩は先師の人格を通して親しく活ける大哲人の坐談に接す感がある。

文學士木場丁本譯　近刊

プラトーンの教訓

金七十錢　郵税八錢

本書が收むる所の『プロタゴラス』、『シムポジウム』、『フェードン』の三對話篇は、雄渾なるプラトーン思想の依つて立つ三脚である。一は當時の所謂學者プロタゴラスを對手として德の何物たるや論じ、二は樣々な性格の人物が集まれる愉快なる祝宴の談論中に至純至高の愛を讃美したる者、三はソクラテスが死に就く當日の光景を叙し、「哲人は常に死の問題を研究する者也」といひし彼が臨終の態度、肉の解脱、靈の永生の意義を詮明したものである。譯文はシュライエルマッヘルの獨逸譯により、平明なる口語體を採りてあるから何人にも容易に了解する事ができる社會に活動して勝利者たらんと欲せば實力を有せざるべからず。實力とは何乎金力乎權力乎學力乎本書は此等以上の力卽ち品性の力を皷吹することに於ては天下無比の良書也。敢て勃興國民の精讀を慫慂す。第四版發行するにあたり特に先生に改譯を乞ひ難解の本書を容易に了解する事のできる樣努めたり。

理學士稻葉昌丸譯　改譯改版第四版

エピクテタスの教訓

金七十錢　郵税八錢

曉烏敏著

凋落

金七十錢　郵税八錢

最愛の妻が結核病で長い勞ひした揚句、とう〳〵死んでしまふた、その妻を看護し葬つた夫が、其間の悲愁と悔恨と疑惑と信仰とを記したのが本書である。世の妻に別れた男、夫に先だゝれた女に是非一讀を乞ふ

山邊習學著

聖者の後から

金七十錢　郵税八錢

本書は、著者が、最近五ヶ年間に於ける信仰經驗の記載である。或時は、家庭問題に衝かつて眞闇になり、或時は、死の權威に觸れて油汗を絞り、又或時は、功名と愛着と毒我の念を懷いて苦んだ著者が、親しく聖賢と師友の導きによりて、念々に大悲の誓願力に蘇つた實驗記が本書である。惡毒なる人の子の爲あに濺ぎ給ふ大悲矜哀の涙と、其大威神力は本書の中に躍動してゐると信ずる。（著者白）

清澤滿之著

精神講話

金三十錢　郵税四錢

精神修養に關する先生の經驗を述べたまへる者を集めて一册子としたるを本書とす故に眞摯に自己の精神の修養に心がくる者又は熱心に內心の安住を求むる者一度本書を讀まば其所得蓋し尠からざるべし。

清澤滿之著

佛教講話

金三十錢　郵税四錢

本書の内容は倫理以上の根據、佛教の現利、他力信仰の發得、祈禱は迷信の特徴也、自ら侮り自ら重ずること、普通道徳と宗教道徳との交渉、咯血したる肺病人に與ふるの書等にして精神講話に依りて多大の指導を受けたる人は此書に依て得る處亦尠からざるべし。

清澤滿之著

精神主義

金三十錢　郵税四錢

精神主義は苦みの谷をたどれる迷者、慰めの光明を認めたる歡喜の叫びなり。
精神主義は社會に苦み、自己に惱める人が導びきの如來を信じたる安心の聲なり。
精神主義は事實の記載なり、經驗の懺悔なり吾等の精神狀態を有の儘に表白したるもの也。

清澤滿之著

我信念

金五錢　郵税二錢

これ先生の絶筆にして、また最も圓熟したる先生の信仰の告白也。されば何人も本書を讀んで信味の資となすべきもの也。

無我山房發行書目

多田鼎著

正信偈講話

金一圓五十錢　郵税十二錢

正信偈は、親鸞聖人と共に、他力佛教の大道を歩む者の朝夕讀誦する讃頌也。斯道の教理及其歴史悉く此に示さる。本書は其譯文を掲げ平易に一偈の字義大意を講じ、具に現代の思潮に映じ來る其の新清の奥義を明にせり。苟もかなを讀み得る程のものは必ず茲に斯道の靈旨を領得すべし。六版既に盡き今回第七版出來せり。

多田鼎著

歎異鈔講話

金四十五錢　郵税六錢

第一章親鸞聖人の生涯及眞宗　第二章『歎異鈔』及佛教の中心　第三章本願の内容(一)不可思議　第四章本願の内容(二)惡人正機　第五章信仰の絶對性　第六章惡人の宗教　第七章信仰上の生活

多田鼎著

親鸞聖人

金五十錢　郵税八錢

最も謹嚴なる態度と、平易簡結の文章を以て、聖人が一代九十年間の行迹を述べてあまさず。聖人が熱烈なる信念を傳へて憾遺なからしめんことを期しぬ文字を大きくし、振假名を附したれば、老人、幼年者もこれを讀んで身は遠く聖人の膝下にある思あらん

無我山房發行書目

多田鼎著

恩寵の宗教

金二十三錢　郵税四錢

從來の東洋の思想界の根底には恩の思想が行渡つて居た。然るに新時代の人心にはこの思想が餘程薄らいで居る、何となく生活の上に溫かみがなく、自殺者がふえ、爭論の盛なのはこの爲めである。恩の思想を中心とせる佛教は玆に是非共唱へられねばならぬ『恩寵の宗教』をすむるはこの故である。讀者に慰安策勵のあたへらるゝことを疑ひませぬ。

多田鼎著

佛傳涅槃篇

金八十錢　郵税八錢

夕日が宇内に光被するやうに釋尊は將に涅槃に近いて鮮である。本書は謹嚴の筆を以て六歲の日子を費し、南北佛傳及び廿餘種の經典を纂譯したるもの實に釋尊の血であり精髓である苟も釋尊の尊容に接せんと欲する人は本書を熟讀せねばならぬ。

多田鼎著

大聖釋尊

金八錢　郵税二錢

大聖釋尊の人格がいかに偉大であるかを最も簡單に最も尊く書きあらわしたのが本書である。

無我山房發行書目

佐々木月樵著

親鸞傳叢書

金二圓　郵税十二錢

一本願寺聖人親鸞傳繪二卷、二親鸞聖人正明傳四卷、三親鸞聖人秘傳錄一卷、四錦織寺繪記一卷、五善信聖人親鸞傳繪一卷、六高田親鸞聖人正統傳六卷、七高祖親鸞聖人傳一卷、八高祖聖人御撰述目錄一卷、九高祖御眞影記一卷、二〇宗祖七十三輝考一卷、二一開祖聖人專繪拜鈔記目錄一卷、一二親鸞傳雜事一卷、一三非正統傳一卷、一四評正明傳一卷、一五大谷遺蹟錄四卷、一六鶴のはやし一卷

佐々木月樵著

親鸞傳繪記

金八十錢　郵税八錢

現代に於て尤も深く博く親鸞聖人傳を研究したる著者は先きに『親鸞聖人傳』を公にして、未だ盡きざる思ひ胸に溢れて、玆に正しく本傳繪記を著す中に挿む所の十數葉の傳繪は中村不折畫伯か既刊親鸞聖人傳を讀み感興の中に畫きたる者也。繪と文と相待つて現代の新『御傳繪鈔』たるに耻ぢざるなり。

佐々木月樵著

救觀濟

金二十五錢　郵税四錢

世に救濟を談せざる宗教はない、我を救ひ世を救ふことは凡ての教のよりて起る所にしてまた人の宗教を求むる所以である。本書は飽まで著者の實證に訴へて我絕對他力教の救濟を披瀝したものであります。

無我山房發行書目

佐々木月樵著

秀存語錄

金六十錢　郵稅六錢

本書はどうしても安心が出來ず、信仰が頂けぬ所から、常に眼を聖教にさらし、深夜俄かに名師の門をたゝき、或は高僧に接して種々の教をうけ、身は一派の學頭にてありながら名も知れぬ愚痴無知のいふことも、こはこれ實感の餘瀝なれば丁寧に之を記し置きて、それを自己一生の修養に供へ給ひし一蓮院秀存講師の全語錄なり。

佐々木月樵著

安心坐談

金六錢　郵稅二錢

本書内容

一　私は萬事に不決着で困ります
二　私は生活問題に苦んで居ります
三　私は唯何となく心淋しく存じます
四　私は家庭の和合さへ出來ればと思ひます
五　私は離別の悲みに堪えられませぬ
六　私は氣樂な生活が望みです
七　私は信仰を頂かれば歸られませぬ

佐々木月樵著

親鸞聖人傳

金二圓五十錢　郵稅十二錢

本著書は古今の諸傳は勿論當時の古文書古記錄等をも研究綜合し、更にまた自ら全國の遺跡を巡拜踏査して前後滿九年間の苦心に成りたるもの、加之他力教の教理と信仰と歷史とを聖人の九十年間の生涯中に縮寫したるを以て、人は本書に依りて單に傳記及び其教旨を領得するのみならず必ずや之に依て偉大なる人格と不盡の生命とに接觸すべし、附錄「親鸞傳一覽」は古今の親鸞傳七十八部及其梗概を錄す。

無我山房發行書目

佐々木月樵著

支那淨土教史

全二冊　各冊　一圓五十錢

淨土教の研究は實際的宗教として全佛教の研究也。本書は先づその時代に於ける佛教及びその他種々の思潮の大勢を導れて、常にそれを史上の背景として最も忠實に支那二千餘年間に於ける所の淨土教の教義及び信念等を最も廣く最も深く研究力說したるものにして現時まで紛糾を極むる教義問題解決の判決例也。

上野丹山著　海野香淨編

赤尾道宗 廿一ヶ條 講話

金十錢　郵稅四錢

名に走らず利を捨て、念佛一枚になられた學者で、しかも難有い丹山嗣講が蓮如上人の御弟子で一代の希有人であつた赤尾の道宗の覺書廿一箇條を誰れも解るやうに丁寧に講話をして下された書である。されば全紙一々の文字に御慈悲が溢れて、讀む人の胸に泌み附いて下さる何處までも親切な書である。

淺井秀玄著

赤尾道宗 廿一ヶ條 讃說

金三錢　郵稅二錢

越中五箇山の獨七入道道宗は蓮如上人の御育を受けた尊い信の人である。一日のたしなみには御開山樣の御座候處へまゐるべしとて、丈餘の雪を分けて遙々井波の瑞泉寺に詣で、又壽夢の實や、割木をしとしとれども寤寐にも大悲を忘れじと心懸けられたと傳へられて居る。本書は彼か文龜元年十二月二十四日一ヶ條の各條下に經釋の要文に思ひ立ちし自誡二十一ヶ條の各條下に經釋の要文を抽き聚めて其旨を詳にしたものである。一日のたしなみとしたならばたゞ一ツ詞なれども初めての樣な有難味が湧くであらう。

無我山房發行書目

浩々洞編

鸞聖人親御傳鈔

金三錢　郵税二錢

御傳鈔は本願寺三代目の法主覺如上人の親選にして親鸞聖人傳の最も古きもの也。而して毎年報恩講に於て拜讀するものはまた本書なり。故に施本用として最も適當なるもの也。

浩々洞同人著

鸞聖人親御傳鈔講話

金一圓七十錢　郵税二十錢

本書は親鸞聖人の六百五十回の聖忌に當り現代に尤も深く聖人を渇仰し、尤も厚く聖人を體現しつゝある浩々洞の諸師相謀りて本鈔を繙き謹みて聖人の信仰と生活とを江湖に披瀝せんとして成りたるが本書なり。本書には各段毎に字解と大旨を掲げ、次は至趣を講ぜしもの、尚ほ『四輻御繪傳』縮寫彩色摺と及び其詳細なる『繪とき』とを附す。

浩々洞編

歎異鈔

特價金三錢　郵税二錢

本書は絶對他力の信念を、最も明白に無遠慮に宣べさせられた。古今一切の先覺より聞くことの出來ぬ。特別の思召が、本書によりて味ふことが出來る。

無我山房發行書目

浩々洞編

禮讃

特價三錢　郵税二錢

一　歸三寶偈
一　五惡段結勸の文
一　和讃
一　感謝
一　附錄我信念
一　光明讃歎の文
一　御本書總序
一　改悔文
一　絶對他力の大道

浩々洞編

信仰五部書

金四十錢　郵税四錢

本書は、親鸞聖人、蓮如上人等の御形見である歎異鈔、未燈鈔、口傳鈔、御一代聞書、安心來定鈔の五書を謹纂したるものである。此の五書の尊いことは云ふ迄もない。他力教の奥底を敲いて、信仰の妙力を讃へ、永へに金石の響を傳ふる本書は、誠に世の大燈明である。

浩々洞編

眞宗勤行集

上製　並製　特價十二錢　特價七錢　郵税各二錢

正信偈、三帖和讃、御文五帖目を收む。而して何人にも讀み得る樣總ふりがなを施せり。

無我山房發行書目

曉烏敏著

清澤先生の信仰

金八十錢　郵税八錢

彼は先づ哲學者として豫想された自らも亦かく期しつゝあつた、一朝感ずる所ありて忽ち麻衣求道の出家となつた。重れて智を研き行を勵んだかくて一派の革命を企てた彼は最後に絶對他力の信念に安住したゝ。彼とは誰ぞや、教界の偉人清澤先生である。今その生涯思想及信念を忌憚なく傳へたのが本書である。

曉烏敏著

歎異鈔講話

金一圓七十錢　郵税十二錢

著者は眞宗内の一部の頭の古い人達から赤來往生よりも現在安住に重きを置く異安心者と目されつゝある熱心なる信仰の宣傳者也。異安心か、正統かともかく教界に新氣運を齎すべき大著は出でたり。本書は親鸞聖人の信仰の精髄たる歎異鈔を現代の上に色讀したるもの、著者九年間の苦心に成る靈感記也。

曉烏敏著

吾人の宗教

金三十錢　郵税四錢

宗教は各自人心の奥秘に存する事實である。故に人心の善惡美醜によつて宗教の色彩も異る者である。富豪に富豪の食あり、貧民に貧民の食ある如く智者に智者の宗教あり愚者に愚者の宗教がある。本書に記されたる宗教は予の宗教である。予が精神上の事實であるこれ實に予が心の奥の奥にきらめきし信仰の光である。是れ本書に示せる宗教である。

無我山房發行書目

曉烏敏著

惠空語錄

金八十錢　郵税八錢

親鸞聖人滅後二百年にして蓮如上人あり、蓮如上人滅後二百年にして我惠空師あり。能く絶對他力の大道を宣布せられたり。師は琢如上人の信頼を受け、一派最初の學頭となり信仰の皷吹に努めらる。本書は師の著書中より予の胸に響ける教訓を集めたる者也。

編者謹白

曉烏敏著

求道錄

金三十錢　郵税四錢

一人生の苦味、二落第、三人の我頭を搏つ時に、四男らしき服從、五一念の滿足は永遠の滿足、六如來の大命、七斷乎としたる生活、八彼の物は彼に我が物は我に、九同情を求むるは煩悶の元也、一〇他の罪を數ふるは自の罪を滅するに非ず、一一馬鹿にせられたりとて怒るは馬鹿也、一二勝敗、一三人の自分の同情を受けざるを煩ふ勿れ、一四世の中の事は一條繩では行けぬもの也、一五死及死の觀念が宗教及道德に及ぼす影響

曉烏敏著

佛教入門

金二十錢　郵税二錢

信の一字は佛教の骨であり髓である。これは佛教の門であつて亦宗旨である。本書はこの信を簡明に説けるもの。自己とは何ぞや、如來とは何ぞや、信仰とは何ぞや、の解答は、本書が平易なる文字の中に生々と現はれてゐる。佛教によつて精神の革命を希ふ人に一讀をすゝめます。

無我山房發行書目

曉烏敏著

人々の死

金五十錢　郵稅八錢

死ぬのがいやだ、死なればならぬ。死は人間に對する尤も强き權威である。死ぬときには、どんな氣持がするのだらう。安心して死なれる道はないか。本書は死の幕を開いて、そのあちらに樂邦を眺めた人のいろ〳〵を書いたものである。死にともない人、死の恐ろしい人は是非本書を讀んでください。

柏原祐義　禿義峯編

香樹院語錄

金七十錢　郵稅八錢

本書は、御自筆の自督帳や御門弟の御手控から最も私共の信念の鏡となるものを謹選したもので云はゞ師の精神の全體である。信仰は得やすくして得難しときびしく誡め、又得難くして得易しと優しく導かれた所の嚴烈と溫厚との生きた力である。編者は本書を以て自らを打つ鞭と致したいのであります。

禿義峯編

安心小話

金五十錢　郵稅六錢

遠くは三四百年の古より近くは明治の今日に渉り、上は一代の碩學より下は一介の野翁に至るまで、二百二十餘項の他力安心の自督の佳話を集めたのが本書である。胸をえぐらるる話、涙のでる話、手を打つて喜ばるる話、一たび繙けば卷を覆ふを忘れしむ。著者は家父と共に多年の苦心によりて漸く本書を編んだ。世にありふれたものと異つて一話一話が信仰の玉である。

無我山房發行書目

文學博士　南條文雄著

歎異鈔講話

金八十錢　郵稅八錢

歎異鈔は親鸞聖人の他力信仰の書也といはんより親鸞聖人その人といふ方が適當である、所謂我聖人の心のうちに絕對他力の大精神の凝り固まつたのが本鈔である。本講話は博士が心血をそゝいで何人にも分るやうに其深意を發揮せられたものである。

南條博士著

同朋心得十ケ條講話

金十二錢　郵稅二錢

眞宗の御同行が日常是非共心得ればならぬことを南條先生が丁寧に御話になつたのを多田鼎先生が懇ろに註を書き加へたる親切なる書物であります。

文學博士南條文雄著

梵本和譯五譯對照佛說無量壽經
梵本和譯二譯對照佛說阿彌陀經

金一圓五十錢　郵稅八錢

梵本から直ちに和譯にした御經は建國已來この書が始めてゞある。本書には丁寧に從來の五存大經を對照してある。尙ほ卷末に阿彌陀經の梵本和譯を附錄としてある至極結構な書である。

無我山房發行書目

文學士　近角常觀著

親鸞聖人の信仰

金七十錢　郵稅八錢

親鸞聖人の信仰は他力信念の極致にして來世を照す唯一の光である。本書は近角先生が同一信念に倚りて直ちに聖人の全精神に接觸せられたる實驗の告白である。死後が恐しい人、罪惡に戰く人、病苦に沈む人、人生の無意義をかこつ人、生活難に苦む人々はいかにしても本書を讀まねばなりません。

金子大榮著

讃仰錄

金二十錢　郵稅二錢

心の奥底まで汲みに汲んで其處に一道の光明を認め精神上のあらゆる問題を解決して人生々活の基礎を示したるものは本書なり。讀者の感銘徹底せんこと恰も白刀に觸るゝの概あらん。

中島覺亮著

異安心史

金七十錢　郵稅八錢

本書は著者十數年の苦心によりて、法然、親鸞兩聖人の時代蓮如上人の時代を始め明治近代に至るまで滔々七百餘年間の異安心者の傳記主張及之に對する東西兩本願寺の處置調整等を述べたるもの一般僧侶は勿論一般の信徒は必ず之を讀んで自己信念の鏡と致さればならぬ。

無我山房發行書目

山邊習學　赤沼智善　共著

教行信證講義　信卷　證卷

金二圓五十錢　郵稅十二錢

親鸞聖人に對する熱烈なる敬慕者が、極めて嚴正の態度を以て、平易に簡潔に聖人の信仰的第一の書を解釋したものが本書である。第一卷はすでに大々的渇望を以て世に迎へられたるが、本第二卷は、より以上の注意と經驗とを以つて書かれたから、讀者の心は新らしき開眼を得ることゝ信ずる。

月見柳莊著（平源氏　北條氏）

日本外史講義　第一卷

特價一圓　郵稅十二錢

本書を講ずるに先づ語句の訓釋を施し、丁寧に原文の意義を通解し、主として本文に例を取りて漢文典を教へ、附するに全文總ふりかなを以てす。されば本書は新らしき形式によれる日本外史の最良講述にして、漢文讀書力養成に絶好の良著也。

月見柳莊著（楠氏　新田氏　足利氏　後北條氏）

日本外史講義　第二卷

特價一圓廿錢　郵稅十二錢

山陽が特に心血を注ぎたる、忠臣楠氏記、新田氏記、は本卷に在る、興趣多き後北條氏記もある。前卷に比し、訓釋は餘程詳密を加へ、文典も漸次精細となつた。一讀して、講述者が讀者の智解を增進せしむる上に如何に周到なる注意を致しつゝあるかを見よ。

無我山房發行書目

浩々洞編

佛教辭典

金二圓　郵税十二錢

佛教本典の要語各宗教義の術語は勿論、國史國文等を始めとして苟も佛教に關する所のものは、梵漢和に渉りて始んど之を網羅し盡したり、その解釋の引締まりて簡明平易なること、世間讀書家の一日も座右に缺く可からざることは佛教界の『言海』として宗教家、教育家、その他各方面の學者の推奬する處となれり。敢て一般讀書家に謹告す。

加藤智學編

簡易眞宗聖教

前編特價九十錢　郵税八錢
後編特價一圓廿錢　郵税十二錢

何れの宗教に於ても是非簡易聖教はなければならぬ。しかるに眞宗に於ては未だ完全に編纂せられたものがない。編者は多年の苦心を累ね、やうやく我眞宗簡易聖教を編纂した。漢文は全部を和譯し且つ各聖教の全意を解し得る樣に文章を抄成し七祖聖教の如き難解のものも皆讀み易く解し易からしめたり。尙ほ本書の内には七祖聖教假名聖教眞宗法要に漏れて居る幾多の有難い聖教が加へられてあるから一度本書を繙けば一宗の法藏を深く廣く採ることができる△内容目錄進呈△

連枝大谷瑩亮序
連枝梅上尊融序

眞宗聖典

特價　金欄表裝金一圓廿錢
皮表裝金一圓
クロース綴金七十錢　郵税各八錢

大派用聖典は立花師譜節の伽陀文類正信偈念佛和讃二陶三陶五陶式間念佛等を收む、本派用聖典は澤圓諦師章譜の梵唄禮讃及三帖和讃全部を收む、而して各聖典に親鸞聖人全書及蓮如上人全書の内重なるものを收む、故に本書一册を懷にせざいかなる場合にも不便を感ずことなし。

釋宗演序
日置默仙序　來馬琢道編

禪宗聖典

特價　金欄表裝一圓三十錢
皮表裝一圓十錢
クロース綴八十錢　郵税各八錢

禪宗の經典祖錄百餘種を網羅し、和訓し、振假名を附し、誰にでも讀み得る本邦未曾有の寶典。編者十數年の蘊蓄を傾けて今や世に出づ。禪を知り禪に參ぜんとする者は先づ本書より入れ。内容目錄は申込次第送呈す。

知恩院法主序
增上寺法主序　望月信道編

淨土宗聖典

特價　金欄表裝一圓六十錢
皮表裝一圓四十錢
クロース綴金一圓十錢　郵税各十錢

淨土宗聖典は淨土宗の全分を打つて一團となせる聖典也。卽ち淨土宗の教義。淨土宗の信仰。淨土宗の經教、淨土宗の儀式、淨土宗の起原及び法然上人の人格を知らんと欲する者皆本書を讀むべし。特に後伏見天皇の勅命に因りて撰集されたる四十八卷の傳記は鎌倉全佛教の具體的標示にして修養書の上乘たり。これ本書が淨土宗の權輿にしてまた聖典たる所以也。

日蓮宗管長序　柴田一龍
顯本法華宗管長序　山田一英編

日蓮宗聖典

特價　金欄表裝一圓四十錢
皮表裝一圓廿錢
クロース綴九十錢　郵税各八錢

本書は世界的大教典たる法華經と絕世の教傑聖日蓮の遺文を以て組成す。法華經一部八卷は音訓兩點として開結二卷は訓點として之に要品を和訓す。御遺文は御鈔八十餘章を大意類、宗要類、教義類及御消息類等に分ちて書き下だし之に總ふりがなを附したれば全篇何處を見ても讀めぬ處なし。是れ實に本宗未曾有の聖典にして國民必讀の要書也、附錄として御傳記讚經要文、同向文等の全部を網羅す。

紹益禪師提唱
今津洪嶽講義　全三冊

碧巖集講義

特價各冊一圓廿錢　郵稅十二錢

紹益禪師の提唱本則百章頌則三百章を中心とし之に加ふるに斯道に造詣深き洪嶽師が垂示、本則、頌、着語、評唱に渉りて丁寧なる讀方、字解、講義を施したるもの實に禪門講學上に新紀元に作りしもの也かりにも假名を讀み得る人にして本書を繙かば萬人皆其快明の玄旨を探り得て岩の如き不動の精神となら ん。

神保如天著　全三冊

從容錄講話

各冊金一圓五十錢郵稅各十二錢

從容錄は碧巖集と併稱せらるゝのみならず、殊に、內容の文字が文學的色彩に富むことは、古來禪界獨步と稱せらるゝ要書なり。本書は、序講四章において、本錄の概要、著者の傳紀等を述べ、本講百章において、原文の句讀訓點、和譯、字義、大意、講話の各項に分ちて、一語をも漏さず叮嚀の解釋と宗義の玄底を示しぬ。文章平易簡明。總ふり假名を附し、よく時代の思潮を汲んで、新進參禪者の要求に答ふ。初學者はこれを讀んで初めて禪の何物なるかを知るべく、久參者もこれを味ひて笑ひ自ら新たなるものあらむ。

石川禪師題辭　秋野老師序　神保
森田禪師題辭　山田老師序　安藤　編

正法眼藏注解全書

全九冊　豫約價各冊一圓五十錢　郵稅十二錢

本書は古德の註、解、疏、論說、の總てを收攬して、僅かに此の書一本さへあれば『眼藏』の文々句々の字義や典據を容易に了解せらるゝばかりでなく、各篇の要旨及び全篇に渉る『眼藏』の宗意、且つは古來學者の唱へし議論異說等をも明瞭に知悉せられ、さしも に難解難入と謂はるゝ『正法眼藏』も一目の下に會得せられ、隨つて彪大なる日本曹洞禪の特色、道元禪師 綿密の家風を坐らに徹底する事が出來る。

安藤州一著

清澤先生

信仰坐談

金三十五錢　郵稅四錢

澤柳先生の序文に曰く「余は世の修養に志せる者にすゝむるにこの小冊子を再三熟讀せんことを以てするものなり」と。先生今や世にあらざるも世人は必ずこのらちに活躍せる先生の面影に接して長へに無上の教訓を受くべし。

安藤州一著

染香錄

金七十錢　郵稅八錢

宗教は智慧や分別で解るものでない、幸に解つた所が解つた丈では我ものでない。我絕對他力教の信念は全く如來よりの賜物である。この信念には些かの懸値もない。この懸値なき信念を趣味多き事例によりて懸値なくあらはしたのが本書である。

安藤州一著

生活問題

金八錢　郵稅二錢

本書の內容

一。人生と生活問題
二。釋尊と生活問題
三。孔子と生活問題
四。ソクラテスと生活問題
五。他力信仰と生活問題

文學士　本多辰次郎著

高僧逸傳

金二十錢　郵稅二錢

一西教寺潮音師　一垣山和尚　一七里恒順師　一能登の頓成師　一雲華院講師　一五岳老師　一香樹院德龍師　一一蓮院秀存師　一貫昭國師　一公現法親王　一尊融法親王　一清澤滿之師　一南隱禪師　一行誠上人　一藤井宣正師　其他四十餘の近世高僧の逸傳なり

齋藤唯信著

佛教倫理

金二十錢　郵稅二錢

宗教と倫理との關係は古往今來の大問題也。著者。佛教上に於て一隻眼を開き、この大問題に最後の解決を與へんとし、玆に本書を提供せり。理路清明、文章平易、蓋し近來社會の要求に對する快著也。

和田龍造著

宗教問題

金六十錢　郵稅六錢

宗教の本質とは何ぞ、信仰とは何ぞ宗教の今代に於ける活動任務は河ぞ、是等の問題に注意を注ぐ人は本書を讀め、穩健の見、中正の議、空論に走らず偏僻に墮ちず、讀みて心靈の糧とすべく、之を身に行ひ其効果の適切なるを覺ゆ。

無我山房發行書目

山邊習學
赤沼智善　共編

聖典物語

金八十錢　郵稅八錢

本書は浩汗なる漢譯藏經より優雅なる說話、史傳、教訓、譬喩等を集むること五十餘種、中に雄渾なる詩想あり、好個の畫題あり、哀に優しき物語あり、腹を抱へて笑倒せしむる喜劇あり、嚴烈肺肝を衝く如き教訓あり、巧妙なる譬喩あり。文體清く麗くして何人にも解し易く、一讀、著者が苦心經營を知ることが出來る。

リスデビッヂ原著
赤沼智善譯

釋尊の生涯及其教程

金一圓七十錢　郵稅十二錢

著者印度に在ること多年、佛教最後の證權たる巴利語聖典を悉く涉獵し、其研究の基底より組織的に科學的に研究したる本書は釋尊傳として無上の寶典也。研究的著書なりと雖も行論通俗的にして文字潤澤、一讀三千年來世界に大光明を輝せ給ふ釋尊の大人格に接することを得べし。附錄『初期佛教』は釋尊當時の時代史なり、本書は最近發行第廿一版に依り譯したるもの也。

赤沼智善編

七里老師語錄

金五十錢　郵稅八錢

譬喩の上手な、人の心をえぐる、息のつけないほど皮肉な、手足をもがれるほど峻烈な、そして夏の樹陰に重荷をおろして輕々となるやうな有難い話、これを甥に當る人が親しく聞いて手記せられたものから拔き出した書が本書である。博多萬行寺七里恒順師の面目と、その圓熟した信仰とは本書に溢れてゐる

無我山房發行書目

山邊習學著

佛弟子傳

金一圓七十錢　郵税十二錢

十六羅漢の外尚十數人の詳傳を載せ荷も經典に現れたる諸弟子の事蹟は殘らず之を網羅せり。舍利弗、目連、迦葉、阿難等の宗教的大人物が大聖釋尊を中心として當時の社會に活躍せるは絶代の偉觀也。

赤沼智善
山邊習學　共著

教行信證講義　教卷　行卷

金二圓五十錢　郵税十二錢

今迄の講義は少數の宗學者の外、一般讀書家と沒交渉であつたことは宗門に於ける一大缺點であつた。本書は先づ原本を校合して嚴密に誤字脫字を訂し更に讀方、字解、分科を施して一段毎に親切なる本文の講述をなし、要所々には東西各派碩學の見解を列れ進んで燃犀の筆を以て全部に横ばる熱烈なる信火を耀かしてゐる。且つ卷頭には註書講書の解題本典成立の動機、年時一部六卷の綱格一宗教義の大綱等を明かにした。かくて讀者は本書に依りて容易に活ける聖人に接することができる。

柏原祐義著

三部經講義

金二圓　郵税十二錢

今迄の講義は餘りに專門的にて門外者に了解できなかつたのは佛教上に於ける最大缺點である本書は讀方、字解、文科、大意、講義、餘義の各項を設け極めて平易に而も丁寧懇切に解釋し初めて佛教を學ばんとする人によく了解することができる特に序講十三章は淨土教の歷史及び教義の大綱を示し三部經相互の關係を詳述したる新しき文字である三部經獨學者の唯一指針なり。

無我山房發行書目

來馬琢道編

白隱禪師參禪要訣　遠羅天釜

金十五錢　郵税四錢

世に參禪の針路を示せる書籍多しと雖も多くは難解の文字にして其の義を得る極めて難く且つ在家の人に教へたるもの甚だ稀也今此禪師の「遠羅天釜」は旨遠くして辭卑く且つ平易にして在家初心のものにも了解し易き極めて重寶なる參禪書なり心ある人々は本書を座右に置かればならぬ。尚ほ附錄として御多福女郎粉引歌を添へたり

浩々洞編

清澤全集第一　哲學及宗教

金二圓五十錢　郵税十二錢

「人生と表現」清澤全集を評して曰く、清澤滿之先生は明治思想界に於ける偉人であり、永久的人格である。今浩々洞同人によつてその全集が編せられつゝある。本書の如きは高山樗牛全集の上位にあるべきもの、明治時代の內面に眼を向くるものは清澤先生を忘れてはついに形骸を眺めて內部の生命に觸れぬであらう。

洞浩々編

清澤全集第三　日記及語錄

金二圓　郵税十二錢

本書は先生一代の日記及び書翰を輯錄し、これに先生の朋友知人たりし澤柳氏、岡田氏等數十人の口より語られし先生の實際生活の叙述を集めたものである。學生時代、教師時代、教界雄飛時代、肺病靜養時代、家庭破壞時代、信仰復活時代の先生の眞面目が如何に活躍してゐるかを味へ。

無我山房發行書目

浩々洞編

清澤全集第二 信仰及修養

金貳圓　郵税十二錢

明治時代にありて明治佛教を建設し死に瀕しつゝあつた佛陀を蘇生せしめた唯一の偉人は清澤滿之先生であつた。京都帝國大學總長澤柳氏は『退耕錄』に福澤氏と並べて明治の偉人と推賞し、故藤岡博士は『國文學史講話』に明治の宗教を云ふ人は清澤氏を忘れてはならぬと書たその清澤先生の全集の第二卷にして先生が信念修養に關する教示を編したものである。

毎月一回十日發行

雜誌 **精神界**

壹部十五錢上半年分九十五錢下半年分八十錢一ヶ年分一圓七十錢

不平あり不安あり、これあるによりて人は酒に溺れ色に迷ひ、社會主義となる。國家の危き社會の不幸之に過ぎたるはなし。佛陀茲に見るあり靈的平安の一道を啓きて萬民を導き給ふ。『精神界』は佛陀の大道場也、人生の旅に疲るゝ者、死の問題におのゝく人は來りて本誌をよめ。

毎月一回一日發行

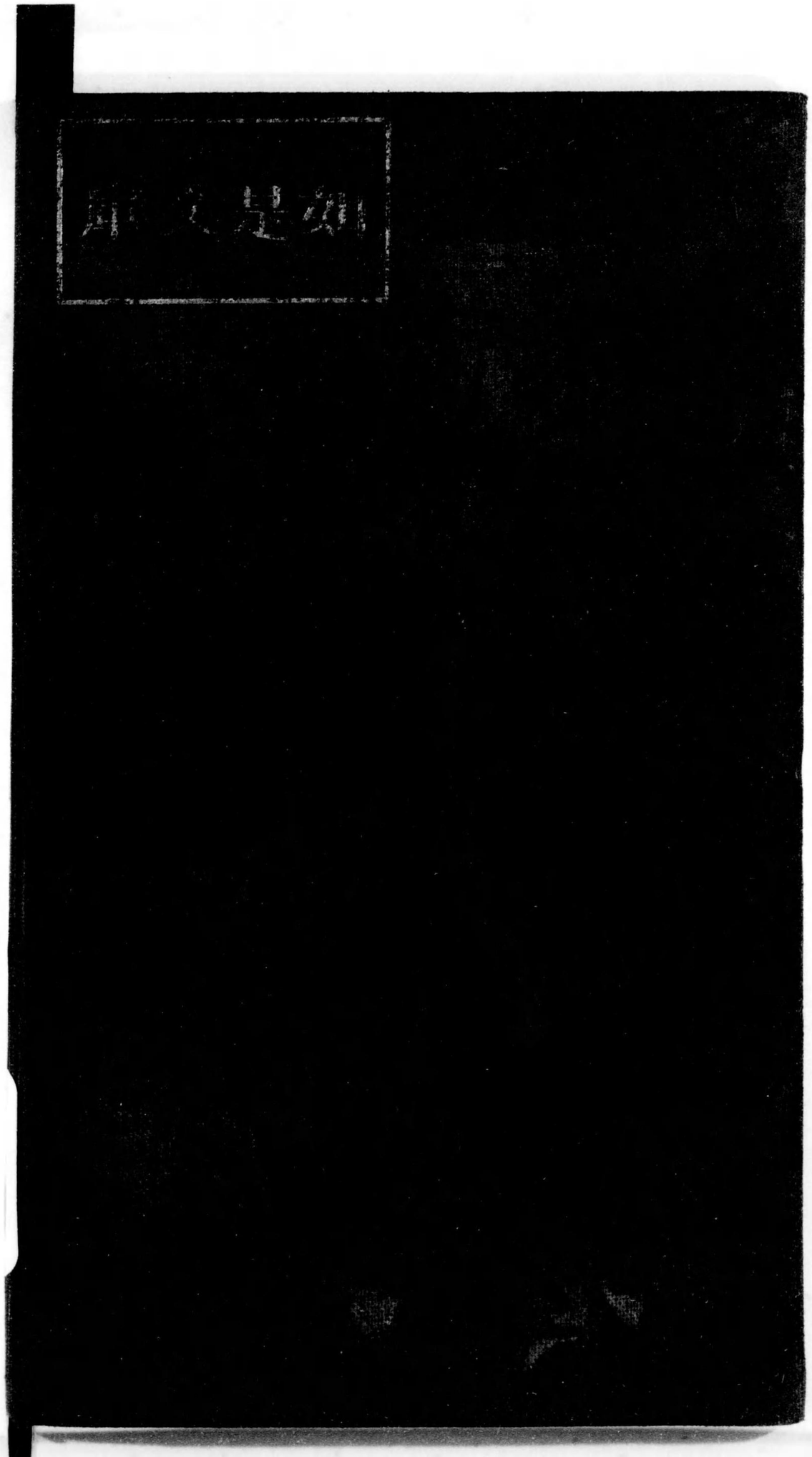
雜誌 **家庭講話**

卷部八錢半年分四十五錢一ヶ年分九十錢

家庭問題に泣く人、幸福なる庭家を造りたき人、又家庭にありて張合のなき人々は本誌を讀め。本誌は他力信仰に基きて、あらゆる複雜なる家庭問題を切り開き、明快に判斷し懇切に指導し常に活動の源泉たる信仰を皷吹しつゝあり。苟も假名を讀み得る人にして一度本誌を繙かば、如何なる家庭にある人も、其まゝ元氣ある生活に入ることを疑はず。

無我山房發行書目

292
1975

庫文是知

終